

|             |          |
|-------------|----------|
| 群<br>教<br>セ | F09 - 01 |
|             | 平16.224集 |

# 相手も自分も大切にし、 自己存在感を高める指導の工夫

——算数科の授業にカウンセリング手法を取り入れて——

特別研修員 渡邊 真宏 （桐生市立梅田南小学校）

## 《研究の概要》

本研究は、算数科での少人数学級において、傾聴・承認・シェアリングなどのカウンセリング手法を授業に取り入れることにより、教師と児童または、児童同士の表現力やコミュニケーション能力の向上を目指してきた。また、授業の中での認め合いや承認の場を多く取り入れてきた。これらの実践を通して、児童の中に互いに認め合う姿や自己存在感の高まりが見られ、相手も自分も大切にできる態度が芽生えてきた。

【キーワード：教育相談 カウンセリング 少人数指導 自己表現 コミュニケーション】

## Ⅰ 主題設定の理由

本校は、ほとんどの学年が単学級で、与えられた課題については地道に取り組む児童が多いが、新しい発想や考えを導き出す活動や自分の考えを発表することについては、消極的になってしまう傾向にある。人間関係については、固定化してしまう傾向にあり、いったん作り上げられた人間関係が生活場面だけでなく、学習場面においても大きく影響している。友達の一面しか見ないといった固定的な見方をしてしまうことも少なくない。学習場面においては、なかなか自分の意見が言えなかったり、自分で考えようとせず、友達の意見に流されてしまったりすることも多く見られる。そのため、活動が消極的になってしまう傾向が見られる。これからの課題として、児童が楽しく自分の考えや思いが発表できるような環境を整えていく必要があると考える。

一方、本校の不登校問題については、学校を休みがちな児童は数名いるが、担任や特学担任、養護教諭などが連絡を取り合い、早い時刻での欠席の把握や電話連絡、家庭訪問などの対応をしている。時には、スクールカウンセラーと情報交換を行い、該当児童の状況の把握や今後の指導の方針の共通理解に努めている。職員も少ないので、日常的な会話や職員会議の中で情報交換をしながら共通理解を図り、該当児童への声かけを中心とした予防的な支援を行っている。本校で不登校傾向にある児童は、性格的に静かで、自分からなかなか友達の輪に入って行けない、基礎的な学力が定着していないという傾向が見られる。このことから、教師としてこれらの児童に対して確かな学力をつけていくことと、学級を中心とする集団の中でのコミュニケーション能力を高めていく必要があると考えられる。

少人数指導担当として、学級全体の児童を対象に指導・支援を行うことは難しいが、担任との連携を図り、協力しながら進めていくことで、本来の学級集団へもよい影響が及んでいくものと思われる。児童の様子を観察していると、大きな集団の中ではなかなか自分の思いや考えが出せない児童も少なくない。このような児童は、小集団になると自分を表現できることもある。反対に、みんなで静かに考え自分の意見をまとめるというときでも、自分の考えを思わず言ってしまう児童もいる。このような様々なタイプの児童に、授業を通して、お互いの気持ちを考えた上でよりよい自己表現の在り方を考えさせていくことは重要であると考えられる。

また、いかにして、児童の自己表現能力を育て、それを引き出し、交流させて授業に生かし

ていくかが教師の課題である。学級を離れて少人数学級にくる児童に、自己表現しやすい環境を整え、少人数だからこそできる初歩的なコミュニケーションを体験させることは、児童一人一人の存在感や成就感につながると考えられ、さらに、学級に戻ったときの自信と意欲となることが期待できる。このことは、児童一人一人が明るい学校生活を送ることにつながり、不登校の予防的な支援の一つにもなると考えられる。

## II 研究のねらい

算数科の授業にカウンセリング手法を取り入れることで、児童の自己表現能力やコミュニケーション能力を向上させ、自己存在感を高める。

## III 研究の見通し

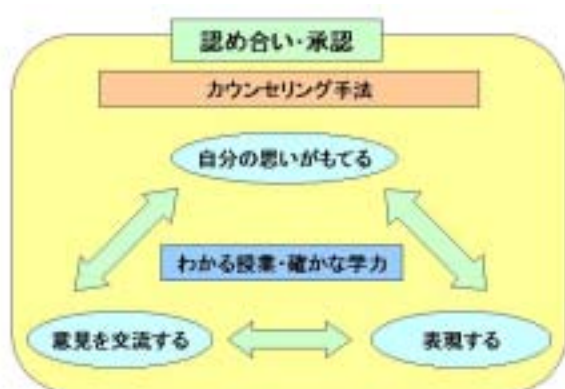


図1 課題解決のためのキーワード

学校生活においては、授業は欠かすことができない時間であることはいうまでもない。児童が生き生きと授業に参加するためには、授業中に自己存在感を感じたり、終了後に成就感を味わえたりすることが大切である。成就感や自己存在感を感じるためには、授業の中で、自分の思いがしっかりもて、それを表現でき、周りの児童や教師から、承認されることが必要とされる。これらの気持ちを感じることができかどうかは、本人の気持ちばかりでなく、一緒に学習する集団の風土（学級風土）や友達同

士の支え合いに大きく左右されるものだと考える。少人数指導においても、その風土をよりよい方向に高めていくことが必要不可欠なのである。また、そこで個に応じた「分かる授業」を展開しながら、自己表現能力やコミュニケーション能力を高めることは、児童の自己存在感を高めることにつながるだろうと考える。

## IV 実践計画

- ① カウンセリング手法を授業に取り入れるための文献研究…スキルアップ
- ② 少人数指導としての望ましい人間関係作り  
基礎・基本の定着（児童の能力に合った授業の展開）
- ③ 自己表現能力を高めるための授業実践
- ④ コミュニケーション能力を高めるための授業実践
- ⑤ 担任との連携の在り方（情報の共有）

## V 研究内容

### 1 目指す児童像

- (1) 自分の思いや考えがもて、表現できる児童
- (2) 友達の思いや考えにも耳を傾け、考えを深めていこうとする児童
- (3) 自分に自信をもち、自己存在感が感じられる児童

## 2 実践に向けての基本的考え方

### (1) 目指す少人数学級のモデル図

成就感・自己存在感の高まる授業

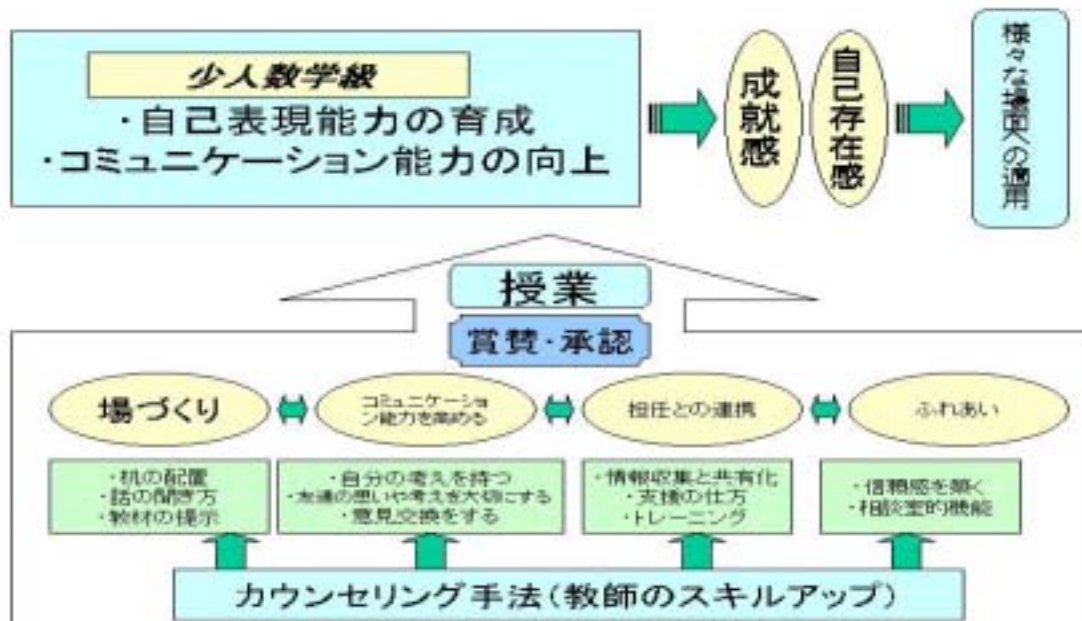


図2 目指す少人数学級のモデル図

### (2) カウンセリング手法を取り入れた授業実践

#### ア 「傾聴」「承認」「シェアリング」の考えを取り入れて



図3 承認－傾聴－シェアリング

児童がどんな気持ちで発言しているか、友達が何を言おうとしているかに耳を傾けることは、日頃の授業でとても大切なことである。時にはうなずき聞くことで、その子のがんばりやよかった点など心の中までが見えはじめてくる。児童は、自分の考えを発表（発信）した段階で、周りからどう思われているかがとても気になる。自分で考えていたことが承認されれば、自分の中で自信にかわり、やる気が育ってくるといえる。その承認をさらに多くの児童と分かち合える場（シェアリングの場）があれば、さらに喜びが増すと同時に他の児童にもよい影響を与え、集団全体が向上していくと考えられる。このような考えをもちながら授業を進めていく。

#### イ 「受容的な雰囲気」を作るために

「友達の考えに耳をかたむけよう」といっても、なかなか児童には伝わらないので、傾聴の意味をより具体的に児童にも分かりやすい表現で提示していく。実際に授業をしているとこれらの欠如が感じられる。誤答については、誤答を誤答として扱うのではなく、まずは発言できたことをほめ、その過程をみんなで考えるような活動を取り入れる。

#### 友だちの考えはこう聞こう！！

- 相手の思いや考えを大切にし、文句は言わない。
- 話は最後までしっかり聞こう。
- 話をしている人の方へ体を向けて話を聞こう。
- たとえ答えがまちがえていても笑わない。
- 自分の考えとくらべて、反応しよう。(うなずき)
- 発表できたら、その勇気にはくしゅをしよう。

図4 児童への提示文

#### ウ 授業中の発問

授業中の教師の発問においては、カウンセリングの手法の一つである「閉ざされた発問」と「開かれた発問」のバランスをとりながら意図的に行っていく。

「閉ざされた発問」…答えが「はい」「いいえ」で答えられる発問

「開かれた発問」…答えが、「はい」「いいえ」では答えられない発問で、「どうして」とか「どんな」などで使うことが多い。

これらの発問をうまく使い分けることで、授業にメリハリが生まれる。また、これらの発問に対しての答えについては、教師側でまずは受け止め、返答があいまいな場合は、明確化・要約・言い換えなどを適宜行っていく。

### 3 実践の概要

(1) 児童の能力に合った授業の展開という視点からの授業実践

ア レディネスの把握（例 4年「わり算」）

基本的に新しい単元に入る前にプレテストを行い、習熟度別クラス編成を行っている。プレテストによって児童の学習に対する実態を把握し、実態に応じた単元計画を立て、授業を行っている。このクラスは、プレテストの結果、かけ算九九につまずきが見られる児童が多く、じっくり時間をかけて基礎的事項の習得をさせることが大切であると考え、この単元（2けたでわるわり算）において、その基礎となるかけ算九九の練習を授業のはじめに毎時間行った。かけ算九九の習得状況とその伸びを一人一人に返し、毎時間励ました。今までできなかったことができるようになったことが明らかになり、がんばる目安が具体的になったことで、学習に積極的に取り組む姿が見られるようになってきた。さらに、自分の伸びばかりでなく、友達の変容まで気にとめる姿が現れた。

#### イ 課題解決学習の展開

毎時間ごとの課題を明確にし、その解決の方法を考え、自分の考えとして表現（発信）していく授業を組み立ててきた。特に考えをまとめていく場面においては、自分の考えがもてたことを賞賛し、様々な意見を引き出した。また、ここでも、それぞれの考えのよいところをさがしたり、考えを板書した人に代わって発表したりする活動も取り入れてきた。このことで、友達のことをよく聞いたり、自分の考えと比較して考えたりする姿がみられるようになってきた。さらに、誤答をそのままにせず、みんなで一緒に考えていくという活動も取り入れた。



図5 発表の場

＜児童の反応＞(授業後の振り返りから)

- ・ 友達の考えがよく分かりました。自分の考えが発表できて、自分の考えをみんなに認めてもらえて良かったです。
- ・ いろいろな意見がいっぱい出て、自分の考えと違う意見があったり、同じ意見もあったりした。
- ・ 自分が前に出て発表できてよかったし、友達のいろいろな考えを聞くことができてよかった。
- ・ 自分が分からなかった所が、友達の意見で「こうだったんだ。」というのが分かってうれしかった。
- ・ みんないい考えをもってて、自分もやる気がでた。
- ・ 他の人の考えが分かって、自分の考えとどう違うのか分かってよかった。



### ＜考察＞

プレテストを実施することで、その単元の素地になる学習の達成状況が把握できたので、その単元の指導に直接生かすことができた。学習の素地になる学習の達成状況がよくない場合には、その授業時間内に補充できる時間を確保してきたことが、児童の学習への成就感につながったものと思われる。習熟度別クラス編成のよい面があらわれた。



図6 児童の多様な表現の例

### (2) 自己表現能力を高めるための授業実践

授業では、自分の考えを素直にもてるようにするために、「自分らしい表現のしかた」をモットーに実践してきた。自分の考えやすいスタイルで、自分の考えをまとめることの大切さを児童に伝えてきた。教師は、児童の「こう、表現したい。」という気持ちに寄り添い、第一に自分の考えがもてたことを賞賛するようにし、児童に自信をもたせていった。そのため、児童は自分の得意なスタイルで表現できるようになってきた。また、発表を通してお互いの考えのよさに気づかせるため、シェアリングを行った。

#### ＜児童の反応＞(授業後の振り返りから)

- ・ 絵で表すといろいろな考えがうかんできた。言葉より自分の考えが表しやすかった。
- ・ 絵を使うとすごく頭の中の考えがうかぶので、描いていくうちに自分の考えがまとまった。だんだん早く自分の考えが表せるようになった。
- ・ 自分の考えに自信がもてなくても絵でかくと結構かけた。
- ・ 面積を求める問題で、紙をきってパズルみたいにしたのが楽しかった。

### ＜考察＞

今までの自分の実践を振り返ってみると、児童に考えをもたせる時、言葉で表現させることが多かった。しかし、言葉で表現することが苦手な児童もいる。そこで、自分の考えを表現する方法にはたくさんあるという視点に立ってみることとした。自分の考えをもたせるためにもまずは、表現方法を規定せず、自分の得意な表現方法で表すことにした。算数においては、「絵で表すこと」が身近で表現しやすいことが実践を通して分かった。また、友達との表し方の違いを比較することで、一つの表現方法にとどまらず、さまざまな表現方法があることに気づかせることができた。一方で、表現方法は違っても、共通性を見出す活動や表現したものを関連付けていく活動などを取り入れていく必要性を感じた。様々な考えに気づかせるために、お互いの考えのよさを認め合う時間（シェアリング）をとることも、自己表現能力向上につながった。

### (3) コミュニケーション能力を高めるための授業実践

ア 座席の配慮（人数や活動に応じて座席の形をかえる。）

#### ＜Uの字型＞

図7は、教師と児童が一体になれるようにUの字になり、移動黒板を使って授業している様子である。Uの字型は、友達の意見が聞きやすい、発表する人の顔が見やすいなどの利点がある。発表時の表情もよく分かるので、傾聴するという面では、とてもよい形態である。教師側としても、児童の表情がよく見え、児童の学習ペースに合わせる事が容易である。



図7 座席の配慮

## イ グループ活動

少人数学級をさらにいくつかのグループに分けて学習した。ここでは、3人グループをつくったが、作業的な活動や話し合い活動に適している。作業的な活動においてはグループ内での小さな会話が

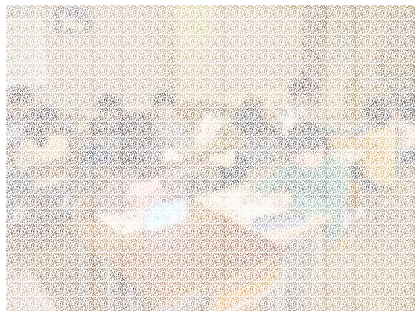


図8 3人グループでの学習

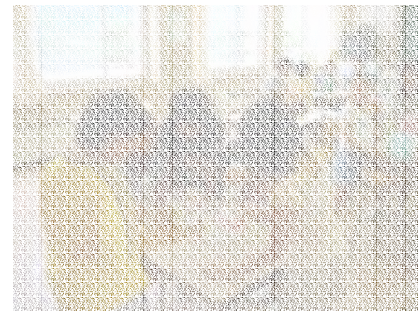


図9 協力しての課題解決

話し合いに発展することもあり、みんなで意見を出し合う姿やグループ内での助け合いがみられた。また、グループが本来もっている力を利用しながら一つの課題を解決していくというグループワークトレーニングを取り入れることで、児童同士のコミュニケーションの深まりがみられた。

### <考察>

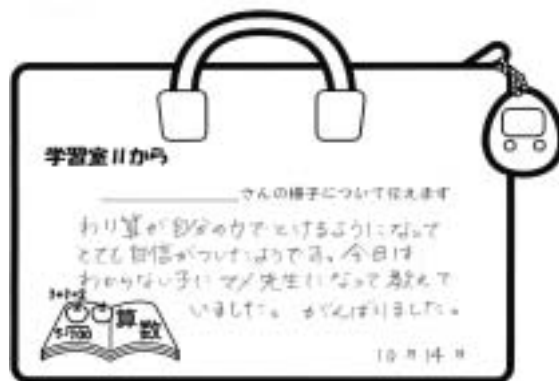
児童は、席替えが好きであり、それが学習にいい影響を与えることは多い。しかし、それが毎時間となるとその効果も薄れてくる。学習に合わせて座席の配慮をすることにより、席替えと同じような効果を生むこともある。例えば、座席の向きを変えるだけでも、自然に発表者と目が合い、表情を見ながら考えが聞けるなど、コミュニケーションの基本が成立し、相手の話を傾聴、承認する上で有効だった。

### (4) 担任との連携の在り方（情報の共有）という視点からの実践

毎時間ではないが、その時間に大きな変容が見られ、がんばった児童に手紙を書き、担任に伝えている。この手紙が少人数学級と自学級をつなぐパイプ的存在であってほしいと願ってきた。担任に伝えることだけを目的とするのではなく、本人にもそのがんばりに気づかせたいという思いで、児童に手紙を届けさせることにした。また、日常的な会話の中でも児童の様子を話すことにし、担任との連携を図ってきた。



図10 がんばった児童への手紙



### <考察>

今までは、話し言葉を介して担任と少人数指導担当とをつないでいた。その日に気づいたことを担任と会えたときに話すことが多かったが、なかなか話ができないこともあった。そのうちに忘れてしまうということもあったので、手紙を考えた。なるべく多くの児童に手紙を書くことは難しかったが、受け取った児童は、うれしそうに満足した表情で自学級へ戻って行った。一方、手紙だけに頼ることなく、担任と話をする機会をもちながら連携を図っていった。

## IV 成果と課題

相手も自分も大切にできる集団をつくるためには、周りの友達や教師とのかかわりが大きく影響してくる。特に、本校のような少人数指導では、単元ごとに集団構成が変わるため、教師と児童、児童同士の人間関係づくりが重要となる。そこで、人間関係づくりの第一歩として、「受容的な雰囲気づくり」に取り組んできた。ここでは、カウンセリング手法の一つである傾聴や承認の考え方を取り入れていった。やはりここでも、集団構成の変化が影響し、なかなか定着していかなかった。そこで、まずは、教師が児童の考えを傾聴し、承認していくことから始めた。すると、次第に集団内に受容的な雰囲気ができてきた。さらに、周りの児童が自分の考えを聞いてくれるようになると、それに伴って、授業中の発言が積極的になってきた。

カウンセリング手法である傾聴や承認を基本として考えていくことは、大勢の前では自分の考えがもてず、発表に対して戸惑いをもっている児童に対しても、とても効果的であったと言える。教師は、意識して承認しようと考えることができが、児童同士では、なかなかそういうわけにはいかない。児童の考えを交換し、コミュニケーションを高める活動を通して、児童にもその変化に気づく目を養うことできた。児童は周りから認められることでさらに自信をもち、自己存在感を感じていくことがこの実践を通してよく分かった。

児童がどんなときに成就感を感じるかというと、算数という教科の特性でもあるが、「難しい問題が解けたとき」「答えが合っていたとき」「テストで100点取れたとき」などいわば達成感で、結果に目を向けている児童も少なくない。確かに児童が達成感を感じることは重要である。しかし、この実践を通して児童の成就感に対する考え方が変わってきたといえる。それは、児童の授業の振り返りから見取れることである。例えば、「自分の考えがもてたとき」「自分が発表して、みんなに分かってもらえた時」「自分がどうして間違えたかが分かった時」「先生や友達にほめられた時」「一人で問題が解けるようになった時」など学習の過程に目を向けて成就感を感じる児童が増えてきた。成就感が高まれば、そこでの自己存在感も高まっていく。このことは、授業中において、自己表現が適切にできるようになったり、周りから認められて自信をつけたりしてきたことの現れであると考えられる。

本研究では、カウンセリング手法を授業に取り入れた実践を行ってきた。「自分の考えをもつ」－「発信する」－「傾聴する」－「承認する」－「シェアリング」という流れは児童一人のことではなく、児童同士、児童と教師のネットワークの中に存在している。それらは、お互いのコミュニケーションの中で育まれて円環的に広がっていくものと考えられるが、その手だてはまだ十分であるとはいえない。さらに、その中で身についた気持ちや力が、自学級やより大きな場に波及するよう、支援していくことが課題である。また、児童の変容は短時間で顕著に見られることが少ないので、長い目で見ながら実践していくことが大切である。

これからも、児童が授業の中で伸び伸びと学習が続けられるよう、特別なものでなく、日常の授業で可能な手だてを工夫しながら授業に生かしていきたい。

### <参考文献>

- ・ 國分 康孝、大友 秀人 著 『授業に生かすカウンセリング』 誠信書房（2001）
- ・ 國分 康孝 編著 『育てるカウンセリング 考え方と進め方』 図書文化（1998）
- ・ 國分 康孝、中野 良顯 編著 『教師の育てるカウンセリング』 東京書籍（2000）
- ・ 群馬県総合教育センター 『不登校問題 課題解決支援資料』（2004）